



永井正取さん 長い間お疲れさまでした

内藤 真治

本フォーラムの会員で多方面に活躍された永井正取さんが3月9日急逝されました。享年80。葬儀で私の思いを述べさせていただきました。

弔 辞

永井さん。こんなに早く、しかも突然にお別れの日が来るなんて夢にも思いませんでしたよ。あなたを知る人はみな驚き悲しんで、こんなに大勢が最後のお別れに来てくださいました。

あなたが健康そうな外見に反していろいろな病気を抱えていたというのに、あなたの類いまれな誠実さと勤勉さに甘えてあまりに忙がしい生活を強いてきました。もちろん余人をもって代えがたい、永井さんでなければ務まらない仕事がたくさんありましたが、中には別の人が代われる部分もあったのではないかと。そのことが悔やまれてなりません。しかしそれほどまでにあなたはみなさんから信頼され、頼りにされていました。

あなたは1943年に長野県で生まれ、育ったのは東京の西部、小平市で小中学校から高校まで。62年に早稲田大学教育学部に進学されます。

66年に卒業、群馬の高校の社会科の教員として榛名高校に赴任されました。その頃の榛名高校は職員会議の運営から学級担任や校務分掌、卒業式、入学式など学校運営のすべてが校長、教頭、教務主任など少数の人たちだけで決められていることに若い教職員は不満を募らせていたようです。2年後にのちに高教組の委員長になる萩原慧さんが転任してこられ、力を合わせて次々に学校運営の民主化を実現していきました。教職員が民主的な職場で仕事ができなければ、どうして生徒たちを民主主義社会の主権者に育てることができようか、との思いだったのでしょうか。

今日この場には当時の榛名高校で永井さんと一緒にがんばった仲間たちがたくさん来ていますが、突然の訃報に驚いて駆けつけた当時のソフト

ボール部の卒業生の方たちも多数見えています。のちほど顧問だった永井先生について話して下さるようですから、ぜひお聞きくださいね。

永井さんが榛名高校分会から推されて群馬高教組の常任執行委員になった1973・74年には公務員共闘の全国統一行動で1日ストを成功させるなど、組合運動の高揚した時期でした。しかしその後永井さんは高商に転任され、88年からは群馬高教組書記長の重責を担われましたが、時あたかも中曽根内閣の「戦後総決算」を掲げた反動期にあつて大変な時代でした。5年の専従期間を終えて学校に戻れば、高教組の組合員には担任を持たせないという特殊な職場で、さぞやご苦労が多かつたらうと推察いたします。

しかし学校以外のいろいろな活動は実に多岐にわたっていました。「群馬・ハンセン病の真の解決をめざし、ともに生きる会」や地域の「群馬郡九条の会」「さよなら原発 群馬郡の会」などの活動はすべて平和と人権の確立をめざすという一点で貫かれていたように思います。

とりわけ2002年以来日朝協会群馬県支部の会長としてその活躍はめざましいものでした。最も近い隣国が二つに分断されている悲劇は、1910年からの36年間、日本が植民地として支配したという事実の原因と、そして責任があります。

そうした歴史的事実さえ知らない日本人が多い。知らないのは知らされなかった結果ですが、知ろうとしなかったから、でもありますよね。

そこで群馬の日朝協会は何よりも歴史の真実を知り広げるという活動方針のもと、他県で例を見ない分厚い機関誌を毎月発行、学習会や講演会の開催、平和のための戦争展への参加、関東大震災後の朝鮮人虐殺「藤岡事件」での犠牲者追悼行事などを続けてきました。県により強行された群馬の森の朝鮮人追悼碑撤去に反対したのは「あつたことをなかつたことにする」歴史修正主義とのたたかいです。撤去は強行されましたが、これからもたたかいは全国に広がっていくことでしょう。

本当に長い間お疲れさまでした。状況は厳しくても、一方で各地に頼もしい若者たちが育っていることも事実です。私たちの仕事は種を蒔くような作業、永井さんが続けてこられた活動を受け継いで、これからも種を蒔いていきます。ゆっくりおやすみください。さようなら。

2024年3月13日